



秘藏

又
き
かし

全

水鳥文庫



春の日

日向の松とハミメ 清代の春 利重
里村の松は連年のものか幸しく果はまの松のまゝなり 世に
知る可あり

えりの木の言の競るはゆかし 重五
競るは加茂のあふあふなるをうけまき 晴夏をきき
えりのまの神は静まきをよむ

さしきのまのまき里外のおきりい 昌幸
まき里のまのまきと足いまき里を

榎亦まき 榎のおきき 証のゆ 荷兮



梅のこいさきすしとさすや葉のけき梅まあり海し
とよ

ふとさす甘山名の尾いせし 九白
ついでいふ山の尾をさす尾のあつとあをひとす梅
んとさす甘山名の尾とちういはりさす尾みしとあ
みしとあ

曙の人魚 牡丹 霞 いしきけ 杜四
人のいしきけを牡丹ととていしきけ人とはんととて
いしきけ唐の玄宗皇帝牡丹を極もよく対梅を絶えりて
賞歎し 李白の詩をいしきけ 白居易の詩の名花頓国西相歎常
得君王帝笑着解釋春風無限恨沈香亭北倚欄于

衣川 高露

すかけのあつとけの衣川 高露
大和本物に鈴掛小葉叢生春將終時開白花扇房又小葉リ花
とていしきけ 新式夏のあつとけ 是あつとけのあつとけ
あつとけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけ
あつとけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけ
あつとけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけ

老聃曰知足之足常足

クワリヤ 雑のあつとけいしきけいしきけいしきけいしきけ
聃の聃ノ誤字也史記列傳曰老子者楚若縣屬鄉曲仁里人也
姓李氏名耳字聃諡伯陽とていしきけ 道德經第四十五章曰禍莫大於
不知足咎莫大於欲得故知足之足常足トアリ 道德經河上公序
曰五味辛甘不同期於適口麻絲涼燠不同期於體ト見之 雑の
あつとけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけ
あつとけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけ
あつとけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけ
あつとけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけ
あつとけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけいしきけ

適の期於體

飲水とせさるるを
サハミツと云ふは
いふの

竹とてさしきりてをまきてまゝとせしむるに揚色しる事
後河内神楽の事さうとてしる 揚色し古歌よ
ちつやしつ流るるまきくくくし 書をなすまきり

己の年やむしりまのをふつゆ 荷分
柳押す日 けこの年の荷分りし辰あつし ありし時を者首
観をゆくしとてしる 揚色しけり神皇元記に己年撰之

つまつりかきしつ流るる 流極し 傘下
揚色しすきりて 甚本をつつし竹の皮を穂の所は是をて 穂
のこしくし命を柳流るるし けし 甚本えやを 君後みよは
えり 柳さるる 流の字 衣形をつつし 流極

たつとち 伊勢の ときり ことり 川 湍水
伊勢国をいし 盲人くく 實文の流の流流るる 名可者あり なるん

人皆伊勢をよむ

子安の主人也 柳を 巻きしりて
巻きしりて

也 柳ありし 修名書ありし 柳 流 嘉堂
蘭亭主人の晋ノ王羲之字逸り古文眞寶ニ蘭亭記アリ 逸
り善書世ニ知れ處也まきり柳の枝を 修石の 巻きしりてとてしる
あゝへし

○譙國の激の園

晋書嵇康字叔夜譙國人性巧而好鍛宅中有一柳樹甚茂乃激
水園之每其月居其下以鍛

鶴の 柳ありし 柳ありし 更衣 荷分
宗祿法師の巻きしりて 巻きしりて 柳ありし 柳ありし

本居の日記にありてある所の事やけりて梅の實
一ツおくらふ年の暮るも一ツあたすわさる

よやせんとして
とりの暮る とちの暮る 一ツはくくと 荷分

之秘之年 たる我人とかはは名め更科の月より遊ばあして
本居の抄より世人のちま度うねと吹く東成へりて誠人の上
一得てそも梅の實を待ててさるわ山あり山原にさるるお
あともんわつとるるとちひるあねと西川の流りて是もんを
とらふや

供屠獲白散

いぢけあわとらあめさち 人法牙 荷子
一献ニ屠獲ニ献ニ神白散ニ度嶂散也屠獲いれ年より
飲らむるを薬とらふ

今日不知誰計會春風春水一時来

氷のし 流のま ち 疾の風 野水
朗詠集ニ白居易詩也又流のいたけを成てかゝるをけ
五言のしめをのけの流れ一ちよるさのあはれをうら
まをあたけいおとらとてのそく流れいよるか
うすをうらとて

白片落梅浮澗水

あまのは角はけり 梅白し 野水
朗詠集ニ白居易詩ニ白片落梅浮澗水黃稍新柳出城墻

春來無伴閑遊少

花のしりりあまのよる 隣り 左
白氏長慶集ニ曲江憶元九詩也

残影燈開櫺斜光月穿牖
獨居や 泣く ぬりさる 月 野水

萬物秋霜能懷色

白きつ 暮らるる人を 秋の哀 全

十月江南天氣好可憐冬景似春美

風と 云々 鳥つゝ 小春 全

朗詠集白居易詩美字作卷

寂寞深村夜殘雁雪中聞

此なき出こぬ びつ 空の原 全

長唐文集 賦礼経
老僧香火燈一盞
白頭夜禮佛名經何
年歎看聲聞酒直
到如今未醒

○賦礼経

白頭夜禮佛名經

佛名の ね 懐く 白頭 全

禪園の 堪ふ 妙し 妙し 妙し

あ~~~~

鋸箱目立

わけらあ の りのこきき 了る 舟泉

一 年 禪園 美 良 なる 撰 職 人 盡 と し 書 けり

糊賣

あきあきの ころり 打けん つも 好友 全
糊をすふ 筆の 心き 拙を 喜ぶ うれし 筆の 首を 敬ふ 筆の

残影燈開檣斜光月穿牖
獨居や 泣く ぬりさる 月 野水

萬物秋霜能懷色

白きつ まするく じんを 秋の哀 全

十月江南天氣好可憐冬景似春美

風と 云々し 鳥つく 小春 全

朗詠集白居易詩美字作卷

寂寞深村夜殘雁雪中聞

此とき 出と ころ びつ 空の 厚 全

長慶集 賦礼経
先僧香火燈一盞
白頭夜禮佛名經何
年秋着聲聞酒直
到如今未醒

白頭夜禮佛名經
佛名の ね 懐く 白髪 全

禪因の 堪ふ 妙し 強ひ けし けし

鋸箱目立

かけろふの りのよきき 了る 舟泉
一 年 禪 因 善 良 なる 堪 職 人 盡 と 書 けり

糊賣

あき ぬ の きる けり けり けり けり
糊をすふ ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり

「...の尾上の極...」外山の... 匡房

即身即佛

無門關曰馬祖因大梅問如何是佛祖云即心是佛云即身即佛云此則の表題也

打うけの火をとる 虫のうら... 探丸

平等施一切

願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國 俊似

鎌倉安國論寺

相約鎌倉相と右日蓮上人安國論を著す... 越人

かえりて... 其角

瘧の瘧の字

者... 傘下

曠野集負外

誰かをいふも... 山名

○緯

文選ニ孫緯カ遊天台山賦曰登陸則有四明天台傍訓山名方石四面自然開窓トアリ日也ト云々

猿蓑集

山名... 緯

通修... 緯... 魚... 史邦

七... 史邦... 魚... 緯

竹瀝
竹離
竹離カ

あつと泥ちゆをい後すへたつし○新衣を束お陸々
下糸糸のつちよ山ノクレーねぬそつ麻のひきつん

糸のむつ ほよ、人ちき重重女 越人
聖聖女龐居士女常駕竹瀝竹離以供朝夕々々傳燈録詳也

霜月朔旦

後まいつ あまあつし 赤可い 良品
七羽押の成りよま自 鈴口北の押く供御備へる用も甘みえ
まのいを可くと何 ころあまあつし 赤拍の七拍の一種
あつ○拍の七羽押の成りよま自 秘原あつし 拍の七拍の一種
とふ見書と七拍の成りよま自 云通つ何しけり何しけり
よ知つさけの赤拍の成りよま自 拍山井上白共三氏のよ
冬色こそせよ 一度思ふあつし 赤拍の成りよま自 拍の七拍の一種
赤拍の成りよま自 拍の七拍の成りよま自 拍の七拍の一種

初もは鈴口北の押く供御備へる用も甘みえ

多賀社江州大上郡所祭伊弉諾尊 尚白

越前矢田野 矢田の押や 浦のふくれり 鳴ふま 九北

江州伊香郡餘吾湖より吉来あはるの事何しとまし 路通

首か 糸きくまわ 日記あり 竹戸

とくわしゆふて

まきの峠 谷のい比敷に似てお、 土坂之道

伊坂か地傍の昔年始て東國へ下り舟寄士をて比敷山をち

たりしつらなれしをいふはけりまは比敷山す

まの路をいふはけりまは比敷山す

りまはけりまは比敷山す

あそひけり ぬけてさむ 本棧舟 枚風

陽田のけりの中は坂谷と本棧一様さうりあまの何れ

甲斐の山にけりまはけりまはけりまはけりまはけり

まはけりまはけりまはけりまはけりまはけり

はくしゆふて

とくわし

君のまもりまはけりまはけりまはけり 去来

日見山とふ山あり紀前國のむ大村領すり足跡、こけり

とくわしゆふて

まはけりまはけりまはけりまはけりまはけり

まはけりまはけりまはけりまはけりまはけり

まはけりまはけりまはけりまはけりまはけり

とくわし

まはけりまはけりまはけりまはけりまはけり 千子

二のいりまはけりまはけりまはけりまはけりまはけり

まはけりまはけりまはけりまはけりまはけり

まはけりまはけりまはけりまはけりまはけり

二のいりまはけりまはけりまはけりまはけりまはけり 之道

書言字考 俗誤用煮字に如はれい煮とよむ(きり)字林

林和靖カ梅花ノ詩 疎影横斜水清浅 暗香浮动月黄昏

百八の如くして 迷ひや 暗の梅 其角
梅の木は数珠の如く ありの陸首八指の粒珠とあり 如梅の如く
さうさうは梅の如く 有り 梅の如く ありん 初子の如く 喜来の如く
梅の如く あり 又海面の如く あり 梅の如く あり 梅の如く あり
ひききり

七種わ 梅の如く 梅の如く 其角

夫木集丹光俊

梅の如く 梅の如く 梅の如く 梅の如く

梅の如く 梅の如く 梅の如く 梅の如く
梅の如く 梅の如く 梅の如く 梅の如く
梅の如く 梅の如く 梅の如く 梅の如く
梅の如く 梅の如く 梅の如く 梅の如く

口を末抄に梅の如く
梅の如く 梅の如く 梅の如く
梅の如く 梅の如く 梅の如く
梅の如く 梅の如く 梅の如く

野馬遊絲
子美所謂
落花遊絲
白日靜是

梅の如く 梅の如く 梅の如く 梅の如く
梅の如く 梅の如く 梅の如く 梅の如く
梅の如く 梅の如く 梅の如く 梅の如く
梅の如く 梅の如く 梅の如く 梅の如く

人の如く 梅の如く 梅の如く 梅の如く

野馬遊絲 子美所謂 落花遊絲 白日靜是
野馬陽燄之氣也 野馬の如く 野馬の如く
野馬の如く 野馬の如く 野馬の如く 野馬の如く

梅の如く 梅の如く 梅の如く 梅の如く
梅の如く 梅の如く 梅の如く 梅の如く
梅の如く 梅の如く 梅の如く 梅の如く
梅の如く 梅の如く 梅の如く 梅の如く

田舎の... 史邦
とせ

返り... 史邦
...
...
...

振... 去來

越...
...

飛... 凡兆
...
...

芭... 曲水
...
...

古今著聞集... 凡兆

けきおのちいすのまゝ

道清山への

道清の代を... 山風集
大田持資入道道清の城に東に日暮り白文先道清山と云ふ

幻住菴記

此山の奥奥向の... 國分山と云ふ...
聖武天王天平九年春詔天下每州建國分寺

可々八幡宮... 聖徳太子... 三曲二百...
風俗文選... 神體... 兩部定を和帝利益の塵土を...

又

東見記曰日本神道有三種一曰唯一宗源唯一之二字一條院雖曰
加之但吉田兼延加之以為得其實也二曰兩部習合三曰日本迹縁起
此是社家者流禁中謂之曰ト祝隨役此外有天子之神道此神道
者知之亦秘而不言羅山先生耳語而相傳焉曰理當心地神道也○
可成談曰兼俱唯ト云ふを云ひ也老子經曰和光同塵

幻住の人の語

神さいといふ年宿又上久又神久とも書ふ居久も心き... 聖武集
おつ... 傍り... 住持... 幻住
... 住持... 幻住
... 幻住
... 幻住

之福之年... 十七歳

二十年やいときふにそむ中のみのをまひ鶴牛のあを
まぢれし 奥の細道の星ききる 南をこし
之祿二年 奥の細道の白く 早稲もあきく 海もあきく
言ふまに ちかみく ちか海のまに 破さきい 破して
ちか海の ちか海は ちか海 ちか海 ちか海 ちか海
の ちか海 ちか海

ふつちを 舟をふらふ 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖

舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖

舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖

舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖

舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖

舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖

舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖

舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖

舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖
舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖 舟の湖

此四句乃公權與太宗
聯句

古文前集二人皆苦炎熱我愛夏日長薰風自南來殿閣生微涼

○涵
○撼

北風を渡りて渾一の山比多のこねり辛
崎の杉の影をあて 城守の松の影をみよ

孟浩然カ臨洞庭湖詩八月平湖水涵虚混太清氣蒸雲夢波撼岳陽
城欲瀆無舟楫端居取聖明坐觀垂釣者徒有羨魚情○漢書薰仲舒
傳古人有言日臨淵羨魚不如退而結網○山家集尹 ちりいやりんつれい
やきいんたれいみよのい

城州宇治郡笠取山
笠と山かふ本想のまじ 麓の小田のまよとまり

拾玉和歌集「大井川 若きにははぬれそふふみやのさ
ちりいんたれいみよのい ちりいんたれいみよのい

士屋のいんたれいみよのい ちりいんたれいみよのい
ちりいんたれいみよのい ちりいんたれいみよのい

田と山とをみるのまよはる 嶽のふかき峰とよ
山

篠生嶽又作小竹生江加西米太郎
思の里のいんたれいみよのい ちりいんたれいみよのい
ちりいんたれいみよのい

猶那をくよふみんと 後の崎のさのり 杉の梢
作 ちりいんたれいみよのい ちりいんたれいみよのい
ちりいんたれいみよのい ちりいんたれいみよのい

山谷詩集題 瀟峯閣詩曰徐老海棠巢上王翁主薄峯菴梅
破顔冰雪綠叢不見○注曰徐任樂道隱藥肆中家有海棠數株
結巢其上時與客巢飲其間王道入參禪四方歸結屋主薄峯止嘗
有毛人至其間問道

○瀟
○峯

天保三辰年五月廿八日字終

茜谷其盛



